

フロネーシスからソフィアへ

—初期ハイデガーのアリストテレス解釈の帰趨—

齋藤元紀

本発表の狙いは、初期以来のハイデガーのアリストテレス解釈を再検討することによって、フロネーシスに対するソフィアの優位を明らかにし、そこに孕む問題とともに、従来見落とされてきた新たな可能性について論じることにある。

1960年代に始まるいわゆる実践哲学の復権運動は、ハイデガー哲学をめぐる解釈状況にとっても大きな転換点をなすものであった。ハイデガー存在論の没倫理性、没政治性に対する反省的意識を一つの機縁として始まったこの復権運動は、1980年代以降、ハイデガー哲学それ自体を実践哲学として読みなおす新たな解釈傾向を生み出したのである。そこで注目を集めたのは、そもそもこの運動の牽引役となったアリストテレスの実践哲学との関係であった。

1989年によく公となった『存在と時間』の実質的草稿をなすいわゆる「ナトルプ報告」(1922年)や、1992年刊行の『ソフィステス』講義(1924/25年)においても、主として『ニコマコス倫理学』に定位しつつ、『存在と時間』の分析を先取りするような記述が数多く見出される。それに従えば、『存在と時間』における眼前存在者に対する道具的存在者の優位、客観的認識に対する配慮的態度の優位、理論や直観に対する気分や関心の優位には、明らかにアリストテレスの実践哲学の影響を読みとることができる。実践哲学の復権運動を背景としたこうした解釈傾向のもと、現在では、ハイデガー哲学の核心的洞察を《理論知から実践知へ》という図式によって捉える見解が一定の共通了解として確立されているように思われる。

しかしながら、「ナトルプ報告」や『ソフィステス』講義をはじめ、現在までに陸続と刊行されてきた『存在と時間』に至る初期講義を詳細に検討するなら、この図式が十分に機能しない場面にも多々出くわすことになる。確かにハイデガーが既存の客観的認識や理論知に実践知^{フロネーシス}を対置させ、伝統的存在論に対する批判を展開したことは疑いえない。しかしながらその批判は、単純に理論知を実践知へと変換するものではありえない。形而上学の超克を唱え、最終的には哲学の名称さえ拒否する後期の姿勢とは異なり、この時期のハイデガーは、アリストテレスやプラトンとの緊張関係のなかで、新たな「形而上学」の確立を目指していた。その試みは、初期以来では「形而上学の復権」として、また『存在と時間』以後では「現存在の形而上学」として展開されることになる。そうした展開を踏まえるなら、実践知に対して、学問の学問としての哲学知、またその最高度の理論的段階である直観知^{ノース}の優位に置くアリストテレスの知の序列は、放棄されるどころか、むしろそのままに生かされていることがわかる。その意味では「ナトルプ報告」において、実践知よりも「理論的な生の徳、ソフィアが前面に出ている」としたガダマーの指摘も、実のところ極めて正鵠を射たものであったと言わねばならない。これは従来の解釈に対して《実践知から理論知へ》もしくは《フロネーシスからソフィアへ》という図式によって表現できるだろう。

もちろんそうは言っても、ハイデガーにとって、理性や悟性などといった伝統的な意味での諸能力の区分のもとでの哲学知の保持が第一次的な狙いであったわけではない。むしろハイデガーの真の狙いは、伝統的な理論知に対する批判を経由して、実践知とともに、哲学知や直観知などといった高次の理論知を、世界-内-存在の構造全体をつうじて新たに活性化することにあった。そこで課題となったのは、一切の知が知として生成するその原初的な場面で作動する根源的な存在と知の関係性を見定めるとともに、それを核心に据えた包括的な哲学的学問の形成であった。このような哲学知を確立するためには、具体的な配慮に満ちた実践知の純度を引き上げるだけでは、もはや不十分となる。そこでハイデガーが試みたのは、哲学知をあらゆる配慮と実践知から脱却させ、究極的な没根拠としての現存在の存在それ自身のうちに差し戻すことによって、あらためて哲学知に対して、《純粹な知のための知》としての自足した身分を与え返すことであった。それによって哲学知は、現存在ばかりでなく、あらゆる存在者の存在に及ぶ眼差しを手に入れることになる。こうした哲学知こそ、実践知や単なる理論知の水準にとどまる諸学問とも異なり、純理論的かつ純存在論的な最高度の学問として、形而上学を自認することができるのだと言えよう。

本発表は、こうした見通しのもと、『ニコマコス倫理学』から『形而上学』そして『自然学』にわたる初期ハイデガーの一連のアリストテレス解釈の構図を視野に収めつつ、とくにフロネーシスからソフィアへの移行の含意に焦点をあてて論じることにしたい。またそのさい、実践知の脱却から生じる諸問題と、全体としての存在者へと展開する知の可能性についてもあわせて考察することにしたい。